

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00393

研究課題名(和文) 神学的モダニズム文学研究

研究課題名(英文) Christian Theology and Literary Modernism

研究代表者

野谷 啓二 (Notani, Keiji)

神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授

研究者番号：80164698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：モダニズム文学は従来、キリスト教からはかなり距離を置く世俗主義的なものとみなされてきた。しかし最近ではT.S.エリオットなど、創作原理をキリスト教神学との対話から得たとする「神学的モダニズム」研究が登場している。本研究はD.ジョーンズを対象に、モダニズム文学に見られる神学と文学の協働に光を当て、「聖体の秘跡」と詩創造との同質性の発見に着目する。「もの」(パンとぶどう酒)であるにもかかわらず、実体はキリストの体になるというカトリックの聖体理解と、making otherというモダニスト詩学の理念が一致し、秘跡とアート、司祭とアーティストの類比関係が成立すると主張するジョーンズの詩学を析出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はジョーンズの本格的な研究を通して、日本におけるキリスト教文学研究の活性化に寄与しようとするものである。我が国におけるジョーンズ研究はほとんど手つかずの状態であるので、「神学的モダニズム」という新たなモダニズム研究の観点に基づく研究の先鞭をつけるものと言えよう。日本のキリスト教文学研究機関としては、日本キリスト教文学会が存在しているが、どちらかと言えば日本文学研究の方が盛んであり、西洋文学の部門でも、プロテスタント文学が主流である。本研究は宗教改革以降の近代イギリスにおいて政治的にも文化的にもマイノリティの地位に置かれていたカトリシズムが、モダニズム文学に影響を与えていたことを示す。

研究成果の概要(英文)：Literary Modernism has been considered secularist doing away with Christian belief. However, a new approach has emerged to explore the positive connection between Christian theology and modernist literature. This project focuses on the relationship between the Catholic understanding of the sacrament of the Eucharist and the poetics of David Jones.

The name "Modernism" in literature is derived from Modernism in theology, which received an impetus from liberalism in philosophy that originated from the Enlightenment in the eighteenth century. Unsurprisingly, therefore, modernist literature often displayed an anti-Christian attitude. Nevertheless, there has been strong resistance to liberal theology from neo-Scholastic/Thomist critics like Jaques Maritain, who significantly impacted modernist poets such as Eliot and Jones. An anti-modernistic trend is an intriguing aspect of literary Modernism.

研究分野：英文学

キーワード：デイヴィッド・ジョーンズ モダニズム文学 イギリスのカトリシズム アナムネーシス

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始時において、キリスト教と文学との関係という研究領域ではすでに、ノースロップ・フライを代表とする「聖書と文学」研究が一昔前から確立された分野となっていた。実際、フランク・カーモード、ジョージ・スタイナー、ハロルド・ブルームといった批評家は皆、この分野で著名な仕事を残している。しかし、20世紀のいわゆる「神が死んだ」世俗社会においても影響力を持ち続ける聖書の物語的様態や、思想枠組みとしてのキリスト教のマクロ研究ではなく、本研究が範とすべき時代と対象を絞った具体的研究となると管見の限りで W. David Soud, *Divine Cartographies: God, History, and Poiesis in W.B. Yeats, David Jones, and T.S. Eliot* (Oxford University Press, 2016) と Anthony Domestico, *Poetry and Theology in the Modernist Period* (Johns Hopkins University Press, 2017) の二著に限られる状況であった。これらはこれまでもっぱら世俗主義的と考えられてきたモダニズム文学の研究に、新たな地平を開くパイオニア的研究であり、キリスト教神学(特にカトリシズム)と文学研究の学際性が、その特徴である。私はこの二著を出発点に、詩人と神学者がどのような照応関係にあり、神学からどのようなエキスが引き出され、作品の創造につながったのか明らかにしたいと考えた。実利のみを求めかに見える日本社会において、神学と文学はともに、ほとんど無視されるか、趣味の領域に押しやられている感があるが、明治維新以来150年を経過した今日、いま一度真剣に西洋の精髓であるキリスト教神学と文学テキストに向き合う必要があると強く感じた次第である。

このような研究を行う土台となったのは科学研究費の助成を受け、30数年にわたって従事してきた一連の、エリオットおよび19・20世紀のキリスト教作家と称される人々の研究である。その成果は『イギリスのカトリック文芸復興』(2006年、福原出版助成金を受け南窓社から刊行)、『オックスフォード運動と英文学』(2018年、開文社)の単著二冊にまとめている。私の関心は一貫して、キリスト教が文化規範として当然視されていた時代ではなく、啓蒙思想、社会科学、自然科学の伸長によって、社会が近代化、世俗化した後も、信仰に生きた作家の思想内容と彼らのテキストがどのような形態を取るかを明らかにする点にある。このような関心を、キリスト教神学、特にモダニスト詩人たちに影響を与えたことが明らかになったジャック・マリタンの新スコラ学、およびそれを支援したヴァチカンのモダニズム神学の断罪という時代のコンテクストを考慮し、さらには20世紀カトリック神学で最も重要と見なされているハンス・ウルス・フォン・バルタザールの「神の美学に関する神学」を援用して、ほとんど手つかずのままに放置されて来たジョーンズの詩業を解読し、その背景にある彼の詩学と哲学の、その中心観念を明らかにしたいと考えた。

### 2. 研究の目的

モダニズム文学研究に新たな地平を切り拓く「神学的モダニズム」研究を行うには、当然キリスト教そのものの理解が不可欠である。この点はこれまでの研究によって培われた知識をもとにすれば対応できると考えた。ジョーンズは第一次世界大戦のソムムの戦いに一兵卒として出征し、塹壕体験を有するので、この方面の知識を新たに獲得する必要がある。さらに戦後になると、ジョーンズはエリック・ギルらのカトリック手工芸者ギルドに参加し、画家、版画家としても活躍した。そのため、ウィリアム・モリスの近代批判に通じる社会・芸術思想、さらには近代国民国家イングランドのプロテスタント主流文化(近代文化)に抵抗する中世主義的なカトリック・イデオロギーが、モダニズム文学者にどのように受容されたかをも考察する必要性が生じる。さらには、戦間期のカトリック知識人に多大な影響を与えたのはフランス由来の新スコラ学であるから、それをも守備範囲に含めなければならない。「神学的モダニズム」研究には、神学、教会史、絵画史、さらに政治・経済思想研究の成果をも取り入れるというかなり幅の広い学際性が求められる。こうした観点からの英文学研究は、まだ日本には少ないと言えるだろう。神の手など借りる必要はないと確信し、その意味で神を殺した世俗主義社会にあって、その流れに抗しながら‘believing’ intelligenceの姿勢を貫いたモダニストの研究により、エリオットらの「個人的心情主義」をヴィクトリア時代のロマン主義の残滓と捉え、それを超克しようとするモダニストに共通する態度の背景には、T.E. ヒュームらの古典主義だけでなく、神が超越性を喪失して人間化し、信仰の重点が宗教感情と社会的道徳規範に置かれるきっかけとなったシュライエルマッハーらの自由主義神学への批判、そして個人を超えた教会ドグマへの信頼があったことが理解される。本研究の目的は、以上のような時代性を認識したうえで、ジョーンズのカトリシズム、特に聖体の秘跡に対するコミットメントの深さに浮き彫りにすることにある。

### 3. 研究の方法

ジョーンズの詩人としての才能を最初に認め、フェイバー社から刊行したのは、モダニスト詩人の代表である T.S. エリオットであった。エリオットは、少数部の発行ながら戦間期のヨーロッパ知識人の交流メディアとして機能した *The Criterion* の編集を通して、キリスト教知識人のネットワークを形成した。純粋な文学メディアから社会、文明論へシフトする傾向は、自身の回心を経て1930年頃から顕著になる。このネットワークに属し、反近代的な論考を発信した人々

の関係をまず整理する。The Criterion はエリオットの知的関心を議論し、普及させるための戦略メディアであったから、書評欄を含めて検討する必要がある。この点、Jason Harding, *The Criterion: Cultural Politics and Periodical Networks in Inter-War Britain* (Oxford University Press, 2002) は最も詳細な文献ではあるが、キリスト教に関しては十分とは言えない。カトリック信者の知的サークルの中心にいたのはトム・バーンズ (Tom Burns, 1906-1995) であり、ジョーンズをエリオットに紹介したのも彼であった。バーンズは 20 世紀の英語圏におけるカトリック復興に欠かせない出版社であった Sheed and Ward の編集者であった。彼の自伝 *The Use of Memory: Publishing and Further Pursuits* (T&T Clark, 1993) と、ジョーンズの最新かつ最も詳細な伝記である *Thomas Dilworth, David Jones: Engraver, Soldier, Painter, Poet* (Jonathan Cape, 2017)、および 1941 年までの書簡が刊行されている *Letters of T.S. Eliot Vols. 1-9* (Faber, 2009-21) についてカトリック知識人たちの思想的交流を確認した。James R. Lothian, *The Making and Unmaking of the English Catholic Intellectual Community, 1910-1950* (University of Notre Dame Press, 2009) は、キリスト教神学がモダニスト詩人たちによって、いかに真剣に問われ、彼等の主要関心事となったのかを浮き彫りにしている。

続いてジョーンズに影響を与えたカトリックの新トマス主義と秘跡神学、その主唱者であったジャック・マリタンの著作とジョーンズ自身の著作を読み、ジョーンズ詩学の実相を明らかにする。当時のカトリック教会内部で進捗した神学のモダニズム (近代主義) に対抗するためヴァティカンの公式神学となった新トマス主義を代弁するイエズス会員マーティン・ダーシー (Martin D'Arcy)、カトリックの文化史家クリストファー・ドーソン (Christopher Dawson)、フランスの哲学者エティエンヌ・ジルソン (Étienne Gilson) の著作、そしてジョーンズのエッセイ集 *Epoch and Artist* (Faber, 1954) と *The Dying Gaul* (Faber, 1978)、書簡集 *Dai Greatcoat* (Faber, 1980)、マリタンの著作、特にその著書 *Art and Scholasticism* (St Dominic's Press, 1923)、そしてグレゴリー・ディックス (Gregory Dix) の *The Shape of the Liturgy* (Dacre Press, 1945)、フランスのイエズス会士モーリス・デ・ラ・タイユ (Maurice de la Taille) の *The Mystery of Faith and Human Opinion Contrasted and Defined* (Sheed and Ward, 1934) を手がかりに、戦間期の神学的モダニズム文学の実相を明らかにした。

以上の準備を終えたのち、ジョーンズの代表作である *In Parenthesis* と *The Anathemata* を読み解く。これらの詩はエリオットの出版社であるフェイパー社から刊行された。ジョーンズは第一次世界大戦の従軍体験から、エリオットが「天才の作品」と称賛した *In Parenthesis* を書いた。この作品はルパート・ブルックやウィルフレッド・オーエンといったいわゆる「戦争詩人」の作品の範疇には入れられない深みがある。ウェールズの歴史、神話が現実の戦争体験と共振しているのである。Thomas Dilworth, *Reading David Jones* (University of Wales Press, 2008)、Carl Krockel, *War Trauma and English Modernism: T.S. Eliot and D.H. Lawrence* (Palgrave, 2011)、Kathleen Henderson Staudt, *At the Turn of a Civilization: David Jones and Modern Poetics* (The University of Michigan Press, 1994)、アーサー王伝説については Beverly Taylor & Elisabeth Brewer, *The Return of King Arthur: British and American Arthurian Literature since 1900* (D.S. Brewer, 1983) の助けを借りた。引き続き、エリオットとオーデンに絶賛された *The Anathemata* を読み、研究の結論として、カトリックの信仰感覚がどのように文学として昇華・結晶化されるのか、その理論化を試みた。*The Anathemata* は、キリスト教の神学概念である「アナムネーシス」の詩であるということである。アナムネーシスとは十字架上のキリストによって捧げられた犠牲の「現前化」を意味し、ミサで祝福される「聖体の秘跡」がその中心である。ジョーンズ詩学では、歴史、現在、未来をすべてつなぐ鍵概念となっている。Adam Schwartz, *The Third Spring: G.K. Chesterton, Graham Greene, Christopher Dawson, and David Jones* (Catholic Univ. of America Press, 2005)、Rowan Williams, *Grace and Necessity: Reflections on Art and Love* (Continuum, 2005)、Francesca Murphy, *Christ and the Form of Beauty: a Study in Theology and Literature* (T & T Clark, 1995)、さらにバルタザールの神学に関しては Aidan Nichols, *A Key to Balthasar* (Baker Academic, 2011) を用いて、ジョーンズの詩学を明らかにし、世俗社会における信仰者の発想と行動を捉えている根底的な要因は何かを探った。

本研究には研究分担者がいないが、デイヴィッド・ジョーンズ研究の第一人者であると衆目の一致するカナダのウィンザー大学教授トマス・ディルワース (Thomas Dilworth) 氏、上智大学名誉教授・元ヴァティカン神学委員・新カトリック大事典編集長、高柳俊一氏から専門的知識の提供を受ける予定であった。その際、一方的に知見を得るのではなく、明らかになったことを報告、コメントをもらう方式を取る。高柳氏はイエズス会員であり、日本の一般的知識人からは得られない有益な知見が得られるはずで、本研究の遂行に大きなサポートとなるものと確信していたが、コロナ感染症の蔓延のために十分な助言を得られないまま、氏が逝去されたことは誠に残念なことであった。しかし、文学創造におけるバルタザールの神学の重要性について最初に教えていただいたのは高柳氏であり、ここに記して感謝の気持ちを表したい。ディルワース教授とは最終年度に面談、貴重な示唆をいただくことができた。

戦間期におけるイギリスの知的状況を知るために、当時の雑誌を幅広く閲覧する必要がある。カトリック系の雑誌はオンライン化が進まず、入手は極めて困難であるので、英国図書館に出張した。また同図書館にはジョーンズの *St Dominic's Press* から刊行された稀覯

本なども所蔵されている。ジョーンズのグラフィックアートの作品はロンドンのテイトギャラリー、ウェールズの国立博物館に所蔵されているので、ロンドン出張に合わせて訪問した。

#### 4. 研究成果

1829年の政治的解放(いわゆる「カトリック信徒解放令」によるもの)以後も、長らく社会・文化的ゲッターに押し込まれていたローマ・カトリック信者の社会的認知に貢献したのは、Sheed & Ward、Burns & Oates、Hollis & Carterなどのカトリック出版社の活動であり、その主導的編集者だったのがトム・バーンズ(Tom Burns, 1906-1995)であった。彼はチェスタトン、ベロック、エリック・ギルに続く、ローマ・カトリック文芸復興の第三期の中心にいたと言える。国教会では、オックスフォード運動に由来する勢力がアングロ・カトリックとして存在し、モダニズム期におけるその代表はT.S.エリオットだった。国教会とローマ・カトリックを結ぶネットワークを構築したのがバーンズである。Criterionを主宰したエリオットの西ヨーロッパ全体に及ぶ知的サークルには、ローマ・カトリック信者で、バーンズの知人がいるのも不思議ではない。エリオットが賛同した「アクシオン・フランセーズ」とは距離を置きながらも、バーンズはJ.マリタン、M.ダーシー、C.ドーソン、T.ヘッカーらと交流し、第一次世界大戦後のヨーロッパの精神的危機に立ち向かおうとした。ジョーンズをエリオット(とフェイパー社)に紹介したのも彼だった。バーンズの企画で重要なのはEssays in Orderシリーズで、そのカヴァーにユニコーンの版画を提供したのがジョーンズである。ユニコーンは、夜中のうちに邪悪な動物が毒を入れた水に、朝のうちに角をつけて浄化し、善き動物たちが飲めるようにする。バーンズはこのユニコーンに三位一体の聖霊を見出し、自らの出版事業の役割、使命と重ね合わせた。彼の周りに集ったカトリック者に共通してみられるのは、「宗教改革、革命と産業主義の時代が、日々の生活のうちにあった聖なる領域を侵食し、功利主義的となって生の不可欠な次元が失われる。宗教無き文化は文化ではなく、野蛮なものだ」という確信であった。このような知的交流圏のなかでジョーンズの精神が形成されたのである。

トム・バーンズが中心をなした1920年代から30年代のカトリック知識人のサークル、およびその出版媒体であったSheed & Ward社の貢献という、いわばジョーンズが身を置いた客観状況を明らかになったので、続いて彼らの思想的営為の内実に焦点を合わせ、カトリシズムとモダニズムの結節点を考察した。ヴィクトリア時代後期のイギリス知識人のリベラルな思想文化的流れを汲み、不可知論者の集団であったブルームズベリー・グループとは対照的に、カトリックの知的集団は、イギリスのカトリック復興の20世紀における担い手であったチェスタトンやベロックが見せた、社会・経済問題を攻撃的に論じる態度から脱し、フランス・ドイツのカトリック思想家との交流から、カトリシズムの美学・哲学を問うようになった。その理念に多大な影響を与えたのはジャック・マリタンであった。特筆すべきは彼の『アートとスコラ哲学』(Art and Scholasticism)であり、これは第一次世界大戦に従軍した後に、カトリシズムに改宗したジョーンズが若き日々に行動を共にしたエリック・ギルらの「ディッチリング共同体」で、第二の聖書として常に読まれ論じられた。現代と中世を結ぶ新スコラ学の代表であるマリタンは、アリストテレスに依拠しつつ行為(プラクシス)と作ること(ポイエーシス)を分離し、前者は道徳、後者は美学によって統御されるとした。これによってアートは道徳的制約から切り離され、没目的性と無償性を本質とする位相に行きつく。Id quod visum placet「ただ見ることで喜びを感じるもの」というトマスによる美の定義に賛同するジョーンズは、アートの原型をカトリック教会の「秘跡」のアナムネーシス〔キリストの贖罪の想起〕とアナセマタ〔捧げもの〕に見出し、芸術と信仰との間にあった緊張を解くことになったのである。

つぎにジョーンズの代表作の一つで、エリオットが「天才の作品」と称賛したIn Parenthesis『括弧の中で』の解説を試みた。ジョーンズは第一次世界大戦の従軍体験から、この詩を書いたのだが、この作品にルパート・ブルックやウィルフレッド・オーエンといった「戦争詩人」の作品と同じ範疇に入れられない深みがあるのはなぜなのか。モダニズム文学の作品に共通する枠組みとして、古典となった文学作品や神話・文化人類学の研究成果を詩作のなかに縦横に取り込む姿勢があるのが、このことが一つの理由であろう。イギリス、特にウェールズの歴史と神話が現実の戦争体験と共振している。現在の瞬間が時空をやすやすと超えて行く。前線でドイツ軍と対峙しあったときに、軍服の色から北欧の「灰色の狼」を常に連想したというジョーンズの発言は、詩人の精神の働き方を示す好例である。戦争を言語で表現する困難さを、シェイクスピアの『ヘンリー四世』のハリーへのアラージョンで克服しようともしている。しかし、実戦に参加した者の記憶を確たるものにし、詩の原形としたものは、微細に過ぎるとも思える個人的な経験であった。例をあげれば、敵軍のマシンガンを持った兵士が、コンサート開始前の調音をする楽手に見えたなど。詩が書かれていく過程で働く、このような特異なジョーンズの感性と観察は、宗教的リチュアル、特に彼が信じたカトリシズムにおけるミサ聖祭の司祭の働きに関連している。

最後にジョーンズの真の意味での傑作The Anathemataを読み解き、カトリック神学とその信仰感覚がいかに詩として昇華・結晶化されるか、その究明を試みた。第一次世界大戦の従軍体験を経て20年代にカトリシズムに改宗したジョーンズは、第二次世界大戦後に発表されたThe Anathemataにおいて、現代の事象と西洋古典や北欧・ケルト神話とアナロジーで結びつけて提示し、人間の想像世界の普遍性を示そうとしている。この手法はモダニズム文学に共通するとはいえ、神話学や文化人類学の研究成果を作品創造に取り込む姿勢は、In Parenthesisよりも一

層顕著である。しかし The Anathemata が真にキリスト教モダニズムの傑作とされる所以は、キリスト教の神学概念である「アナムネーシス」の詩であるからである。アナムネーシスとは十字架上のキリストによって捧げられた犠牲の「現前化」(re-presentation)を意味し、ミサで行われる「聖体の秘跡」がその中心を占める。だからこそ「捧げもの」を意味する Anathemata の最終部において、最後の晩餐におけるイエスの聖体制定、ゴルゴタの丘における神の子羊として自らを捧げる受難、そしてそれ以後、その救いの業を「記念」として繰り返してきた教会のミサが描かれるわけである。すべての人類の救済とアナロジカルに交わる事跡を取り込みながら、ジョーンズ詩学は感謝の祭儀 Eucharistia を中心に、アナムネーシスと文字という「しるし」による表現 (representation) とを重ねあわせ、歴史・現在・未来をつなぐ一点 (here and now) としての詩を構築している。

『アナセマタ』が現代詩のあり方を革命的に変えた T.S. エリオットに認められ、さらには W.H. オーデンによって絶賛された理由は、彼らがともにキリスト教正統への回心者であり、世俗主義的幸福を追求するのみで超越的価値を喪失した近・現代の文学が、個人の心情にその中心を置いていることに不満を感じていたからである。人間が人間であるために、また人間が人間である限り、「ものを作る者」という本性的特徴から逃れることはできない。ジョーンズ詩学の核心は、この人間が根源的にアーティストであるという認識から出発し、その時空を超えた予型をカトリシズムの秘跡、特にパンとぶどう酒をキリストの聖体となるという実体変化に見ずえることにある。聖体の秘跡が持つ「過去と現在の共時性」という特質こそが『アナセマタ』の中心をなしている。秘跡とアート、司祭とアーティストとは類比関係にある。詩と、キリストから教会に付託された神秘である秘跡との同質性を主張するジョーンズ詩学から、アヴァンギャルドとして理解されてきたモダニズム文学の実質は、個人的情緒から逃れ正統を希求する反近代主義(アンチモダニズム)であり、背景にはキリスト教神学、特にカトリシズムのドグマがあることが理解された。『アナセマタ』は神による天地創造から、前史時代、神話時代から現代まで、時空を超えて「作ること」の喜びを語っており、アンチモダンなモダニズム詩の代表といえるだろう。キリスト教最大のドラマは、神のことば(ロゴス)が受肉(托身)し、その体が聖体(The Eucharist)として時の終わりまで継続すると信じるところにある。二千年前にゴルゴタの丘で一回限り起った救いの業が、アナムネーシスとして現在化されるのは、イエスによって制定された聖体の秘跡というアートの賜物なのである。『アナセマタ』の核心はこの聖体の神秘である。

総じて本研究により確認されたのは、カトリシズムの神学がモダニズム文学にきわめて重要なインパクトを与えているということである。しかも研究当初には新しい研究動向と思われたこのテーマがすでに確固たる地位を築き上げていることだ。このことは本研究遂行中に出版された Joanna Rzepa, *Modernism and Theology: Rainer Maria Rilke, T.S. Eliot, Czeslaw Milosz*. Palgrave Macmillan, 2021、そしてジョーンズに関する Francesca Brooks, *Poet of the Medieval Modern: Reading the Early Medieval Library with David Jones*. Oxford University Press, 2021 などの研究書が雄弁に語っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野谷啓二	4. 巻 32
2. 論文標題 'To be redeemed from fire by fire' アングロ・カトリックの信仰実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 T.S. Eliot Review	6. 最初と最後の頁 18-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野谷啓二	4. 巻 8
2. 論文標題 ペイターとT.S.エリオット 二人のキリスト教観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ペイター論集	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野谷啓二
2. 発表標題 T.S.エリオットにとってのペイター
3. 学会等名 日本ペイター協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐藤亨他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 452
3. 書名 四月はいちばん残酷な月	

1. 著者名 清川 祥恵、南郷 晃子、植 朗子他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 368
3. 書名 人はなぜ神話 ミュトス を語るのか	

1. 著者名 マイケル・アレクサンダー、野谷 啓二	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 434
3. 書名 イギリス近代の中世主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------